

トルストイと啓蒙⁽¹⁾ ——文化批判の手法としての「文明と自然」をめぐって——

石川達夫

はじめに

レフ・トルストイの著作を貫く一つのドミナントは、痛烈な文化批判だと言える。その文化批判がいかなる性格をもつものなのか、その一面を比較文学的方法で、特に18世紀フランスの啓蒙主義作家たちと比較しながら明らかにしようというのが、本稿のねらいである。

1

トルストイがルソーから、特に文化批判や「文明と自然」の問題において強い影響を受けたことはこれまでにも指摘され、この方面での研究も行なわれてきた。もちろん、トルストイが18世紀フランスの啓蒙主義作家たちの中ではルソーから最も強い影響を受けたことは確かであるし、個別にルソーだけを取り上げてトルストイとの関係を考察するという研究方法も、それはそれとして良いわけだが、しかしながら、第1に、他の啓蒙主義作家たちの影響も重要なものであるし⁽²⁾、第2に、ルソーとトルストイとの関係をより深く探る際にも、啓蒙主義全体を背景にして見る必要があるようと思われる。

トルストイと啓蒙との関係に関する近年の研究においては、ルソー以外の啓蒙主義作家たちの影響も重要なものと見做すようになってきているが⁽³⁾、特に手法の面でのヴォルテールの影響を正面から考察したのが、チシェフスキーの論文「トルストイと18世紀啓蒙」⁽⁴⁾である。

周知の通り、ヴォルテールは、ヨーロッパの現実を、例えばそれに無知なアメリカ・インディアンの目を通して描くことによって、奇妙で訳の分らない、ナンセンスなものとして見せる、という手法を広範に用いているが、チシェフスキーは、トルストイはヴォルテールにこの手法を学んだのだとして、いくつか具体的な裏づけも行なっている。そして、ある現実を描く際に、あたかも、

その現実に慣れていない、あるいは全く無知な者の目で見ているかのように描くことによって、その現実を初めて見るかのように呈示し、否定的な対象については、それを奇妙で訳の分らない、ナンセンスなものとして見せる、というトルストイの手法は、「異化の巨匠」であるヴォルテールから多く学んだのであり、トルストイの文学のスタイルの面におけるヴォルテールの影響は実に顕著なのであると言う。

しかしながら「異化」の手法はヴォルテールの発明物ではない、とチシェフスキーは続けて言う。トルストイが多く読んでいたストア派にも同じ手法が認められ、トルストイはストア派からもこの手法を学んだかも知れない。「ストア派において、そして、異教的またキリスト教的古典古代の広範な民衆道徳的著作(いわゆるディアトリーベ)において、世の中のナンセンスが示される場合、それはしばしば著者が、当該の世界の物事に未だ十分な経験をもたない一人の異邦人の、時にはまた一人の子供の目を通して当該の現実を見るという、そのことによって示されているのである。このような手法は、更に過去にまで遡ることができる。プラトン、更にはクセノポーン(彼の教養主義批判)にまで。そして、古典古代末期において、恐らくは概してある文化形態の迫り来る没落に際して、現実の批判者たちはこの方法をもって対したのである。古典古代におけるアナーキーなスキタイ人は、ヴォルテールの高徳なイロコイ・インディアンやトルストイの賢いイワンの馬鹿の先行者なのである。」⁵⁾

概してある文化形態の没落に際して「異化」の手法が文化批判の手法として用いられたというチシェフスキーの説を、本稿のテーマに沿って、まず啓蒙主義の場合について検討してみたい。

啓蒙主義の場合、文化批判の手法として「異化」の手法を用いたのはヴォルテールだけではなく、例えはモンtesキューは空前の成功を収めた『ペルシャ人の手紙』(1712年)の中で、ヨーロッパの現実を、それに初めて接したペルシャ人の目を通して描くことによって「異化」し、そのナンセンスさを暴露し、文化批判を行なう、という方法を用いている⁶⁾。しかし、この作品とて嚆矢というわけではなく、それ以前にも同じような手法の作品が出されていたのであり、モンtesキューはそれを芸術作品として完成させ、ヴォルテールはこの手法を「巨匠」の域にまで高めたのだ、と言った方が良いだろう。

そしてこのような手法は、まさに、フランス絶対王制が多くの弊害を生み出し、社会の腐敗が進行し、ブルジョワジーが台頭し、矛盾が激化し、やがては1789年の革命へと至る、フランス貴族文化の没落期に文化批判の手法として用

いられたものなのであった。

このような手法の発生の事情と文化史的な意義は、ポール・アザールの『ヨーロッパ精神の危機』によって知ることができる。

ポール・アザールによれば、このような手法は、「静」として特徴づけられる、政治的には絶対王制、文学的には古典主義の時代が「動」の時代へと移行してゆく時期に発生した。17世紀末から18世紀初頭にかけて旅行趣味が全ヨーロッパ的流行となり、多くの旅行記が書かれ、人々は未知の国や蛮地と見られていた世界を知るようになったが、それと共に人々のパースペクティヴは変わり、「静」の意識は動搖をきたしてきた。超越的と見えたものも相対化され、人々の生活慣習も場所によって異なるものと理解され、突飛に思われていた慣習も起源と環境から説明すれば筋が通っているように見えてきた。ここに、未開人は軽蔑すべき低級なものと決まっているのか、幸福な未開人は存在しないのか、という疑問が生じたが、非ヨーロッパ世界を行った各派の宣教師たちは、ヨーロッパ人には見られない原住民の美点をほめたたえ、更には、文明人は精神的にも肉体的にも歪められた異様で不幸な存在であり、自然という慈母に従う未開人の方がより高尚で幸福なのだとする旅行記も現われ、「ポン・ソヴァージュ(善良な未開人)」という観念が一般に信じられるようになった。ところで、旅行記は実際には旅をしない者によっても書かれるようになるが、その架空の旅行記の本当の狙いは、架空の土地に赴いてヨーロッパの宗教・政治・社会の状態を総点検することにあり、社会は根本から作り変えられねばならないことを明らかにすることにあった¹⁷⁾。

即ち、フランス絶対王制の文化形態の没落期に、人々はより良い、別の文化形態を求めるのだが、それを、本質的にユートピアとして想定される「自然」の世界¹⁸⁾の中に見ようとし、また、ユートピアとしての架空で理念的な「自然状態」の側に立って当時の現実を批判したのであった。

そして、ルソーは、このような志向を極みにまで推し進め、「自然」はあくまで文化批判の方便であるとして文明の進歩を認める百科全書派と袂を分ち、「文明と自然」の問題を最も鋭い形で提出し、「文明」に対して「自然」の側から深刻な疑問を投げかけたのだと言えよう。

トルストイが啓蒙主義の諸作家に近づきながらもルソーから最も強い影響を受けたということの意味も、ここに求められるのである。

に示した位置、即ち、上流階級=「文明」に属しながらも、民衆=「自然」に近く、部分的には後者に同化した立場の者に設定されていて、ここから、トルストイの作品のダイナミズムが生まれている。即ち、図1のA'に属する、トルストイの自伝的な主人公は、民衆的・自然的立場から上流階級の文化を見て、そのナンセンスさを暴き、批判するのだが、同時に、所詮は民衆=「自然」に同化しきれない上流階級人として民衆=「自然」を観察し、その際、自分自身の中にも自ら批判した文明の悪がまことに拭い去り難く染み込んでいることを痛切に自覚するのである。

こうして、トルストイの自伝的な主人公は、文明の悪・上流階級の文化の悪を批判しつつも、さりとてあっさりと民衆=「自然」に同化してしまうこともかなわず、自ら上流階級に向けて放った批判の矢は自分自身へと戻って来て、そこから啓蒙主義の著作の単純な主人公たちには見られなかつた痛切な内省が生まれ、それが彼をして、激しい自己変革と真実の探求へと衝き動かす。つまり、トルストイの自伝的主人公は、人間の正しい生活形式、生活の真実の永遠の探求者たるべく定められている。このような性格は、啓蒙主義の著作の主人公たちには見られなかつたものである。

4

さて、このような性格をもつトルストイの自伝的な主人公を衝き動かす原理は、異質な文化に触れることによって自己の内なる他者=文化を発見し、それを相対化し、自由な同化を求める、という原理である。そして、彼らが自分自身の中に発見する内なる他者=文化とは、本来的で自由な自己ではなく、人間の生活の唯一正しい形式などでは決してなく、単に、無数に存在する生活形式のうちの一つに過ぎない文化、しかもなお、自らを唯一絶対なものとして成員に押しつけてき、事物や人間に対する自動化した、因襲的な見方や価値観を強制してくる文化なのである。彼らが自分自身の中に発見するロシヤ貴族文化とは、『コザック』の主人公オレーニンの言葉を借りれば、自らを自分のまわりで生きている動植物や民衆と同じく、すべての生きとし生けるものと同じく、ただ暫く生きてから死んでゆき、「後には草が生えるだけ」¹⁴の生ける存在として捉えるよりも前に、自らが不自然で歪んだ存在であることは見ないまま、様様な二次的な規準によって自己を民衆から区別して、自分を何か高尚な存在であると思い込む反面、民衆を一方的に野蛮で低い存在と見做そうとする文化だったのである。

トルストイは、ロシヤ貴族文化が没落してゆく時期に、この自己の内なる他者を徹底的に客体化し、相対化し、執拗に拒否しようとする一方、これと対極的な文化、身近な異文化であったロシヤ農民の文化へと自らを方向づけたのだと言えよう。トルストイが民話を書き始めたり、貴族的な生活様式を捨て、生活を簡素化しようとした、自ら薪を割ったり水を汲んだり畑を耕したりして農民の生活様式を身につけようとしたことも、トルストイのこのようないの志向の最終的な帰結であったと考えられる²⁴。

しかし、また、このような原理に基づくトルストイの思想の否定的な側面にも触れておかねばならない。トルストイに認められるユートピアニズム、マキシマリズム、反教養主義的態度、反歴史主義的思考は、恐らく、文化の没落期に文化批判の手法として異化の手法を用いた者たち²⁵に多かれ少なかれ共通して認められるところであろうが、特に、啓蒙主義においては理念的性格が強く、積極的に肯定されるテーゼとしてよりも批判の拠り所としての性格の強かった「自然」を、現実的に当時のロシヤの農民と同一視しようとする傾向の強かったトルストイにおいて、特に顕著なのである。

例えば、トルストイ初期の教育論文である、「誰が誰に書くことを学ぶべきか、農民の子供が我々にか、それとも我々が農民の子供にか」²⁶（1863年）という奇妙な題のつけられた論文を取り上げてみよう。

この論文の中で、トルストイは、ルソー的な「自然」の現れを子供の中に見、子供は真・善・美の完全な調和を身につけてこの世に生まれると言ふ。「子供は、我々が探し求めている真・善・美を不斷に呈示している無精神の存在——植物、動物、自然に近い。あらゆる人々に、子供は、無垢と無辜と真・善・美の模範を示してきた。人間は完全なものとして生まれる——これはルソーが語った偉大な言葉であり、この言葉は磐の如く厳然として眞実なものとして残るだろう²⁷。」

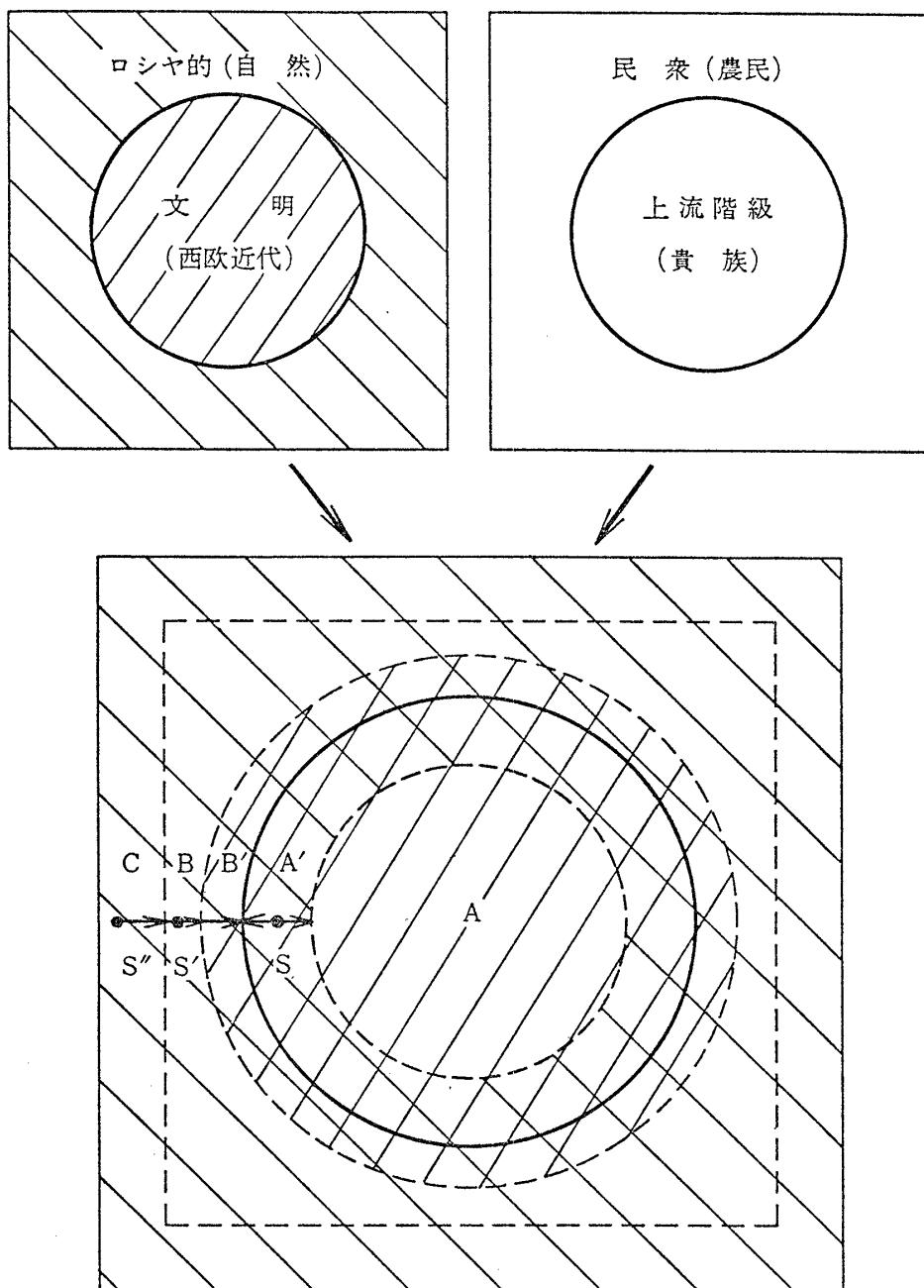
そして、このような観点から、トルストイは、11歳の子供、しかもより「自然」に近い農民の子供の作文を褒めちぎり、「読み書きもおぼつかない」11歳の農民の子供が「その発達のあらゆる無辺の高みにおいてゲーテさえも達し得ないような芸術的力を發揮し」²⁸、トルストイにはその作文を直す能力がなかつたばかりか、彼が手を入れた個所はみんな悪くしてしまった、という。

今、一例として挙げたような、現実の存在を本来的に理念的なもの²⁹と同一視しようとする思考法が、現実的には大変な混乱をもたらし、蒙昧主義にさえ堕しかねない危険性を孕んでいることは、言を要しないであろう。

(ヘルツツキーの場合は、チェコ同胞教会の精神的父となった), その他、個々の思想での共通点やスタイルの類似性も指摘できるであろう。

- (11) 「簡素さ」は、原語では *prostota*.
- (12) 「素朴だ」は、原語では *prostý*.
- (13) Chelčický, Petr. *Sít' víry*. Praha, 1950. p. 224. なお、ヘルツツキーの文章は、トルストイのそれに似て、重苦しく、しばしば見通しのきかないもので、これが彼の文体上の特徴となっている。
- (14) トルストイはヘルツツキーを評して、「ヘルツツキーはいかなる徹底性にも驚かなかった。彼はあらゆるもの、その最後の極限にまでもっていった」と言い、ヤン・フスをヘルツツキーと対立させて、「フスはその教義においてドイツ人であり、あらゆる点において妥協者だった」と語ったという。(Z. Nejedlý. pp. 275-276.) このトルストイの評語なども、トルストイとヘルツツキーの関係を探る上で興味深いものである。
- (15) 本稿ではストア派について具体的に検討することはできなかったが、本質的な共通性を見出すことは困難ではないであろう。
- (16) 「自然」への志向、反文明、反教養主義、反歴史主義等。
- (17) 例えば、ナロードニキとトルストイとの間には多くの共通点が認められるが、また、重要な相違点も存在する。cf. I. Berlin. (註(1)参照)
- (18) (次頁参照)
- (19) Л. Н. Толстой. Полное собрание сочинений. т. 6. Москва, 1936. стр. 77.
- (20) このような生の原理においても、トルストイの一番の教師はルソーであったと言えるだろう。なぜなら、ルソーこそ、「自己の決定的客体化の偉大な創造者」であり、彼の思想は「自分自身との同化を拒否する原則」と、「他者との同化の原則」という二重の原則から出発しているからである。(レヴィ・ストロース「人類学の創始者ルソー」, 堀嘉彦訳, 『現代人の思想15, 未開と文明』, 平凡社, 1970年, 63-64頁参照。) ちなみに、啓蒙の流れを引くレヴィ・ストロースのような現代の西欧近代文明の批判者たちとトルストイとの間に多くの共通性が見出せたとしても、不思議ではないであろう。例えば、ディドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』とトルストイの『コザック』とレヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』とを読み比べてみると、『コザック』も『悲しき熱帯』も、「文明と自然」という対立を文化批判の手法として用いた18世紀の旅行記の流れを汲むものと言えるだろう。
- (21) 古典古代において「蛮人」を賞揚した者たち、ヘルツツキー、ルソー等。
- (22) 原題 «Кому у кого учиться писать, крестьянским ребятам у нас, или нам у крестьянских ребят?»
- (23) Л. Н. Толстой. Полное собрание сочинений. т. 8. Москва, 1936. стр. 322.
- (24) Там же, стр. 308.
- (25) トルストイにおいては「自然」。
- (26) フス運動においても、原理をそのまま現実に移そうとして、否定的な行動（文化遺産の破壊など）が行なわれたことを想起されたい。

図1. トルストイの文化モデル



A : 上流階級 (貴族)

A' : 周縁。オレーニン, ピエール, レーヴィン, また, トルストイ自身のように,

- 民衆に近く、「文明」に属しながらも「自然」をも残している貴族が属する。
 Sは彼らの視点。トルストイのテキストの多くは、ここをテキストの担い手の視点にしている。
- B：民衆(農民)。S'は民衆をテキストの担い手としたときの視点。『牧歌』等はこれにあたる。
- B'：民衆のうち、文明の毒に染まった者。稀ではあるが、『コザック』の少尉イリヤー・ワシリエヴィチ等が属する。民衆の世界を描いたテキストにおいては、彼らが「文明」を代表する。(cf.『イワンの馬鹿』)
- C：自然そのもの。S"は自然そのものに置かれた視点。『ホルストメール』等。

Л. Н. Толстой и просвещение
 — Вопрос “цивилизация и природа”
 как прием критики культуры —

Тацуо ИСИКАВА

Задумываясь над вопросом “цивилизация и природа”, Толстой во многом следовал французским писателям-просветителям, которые использовали со-поставление “цивилизации и природы”, как прием для критики культуры. Эти писатели изображают европейскую цивилизацию так, как будто читатель видит ее впервые, глазами “человека природы”, не знающего ее систему, и тем самым “остраняют” культуру и подвергают ее критике.

Возможно, что Толстой в этом отношении в некоторой степени продолжал традицию не только французских просветителей, но и стоиков и Петра Хельцицкого, которые часто изображали культуру, окружающую их, как бы извне, с точки зрения, находящейся не внутри этой культуры.

Можно сказать, что такой прием использовался вообще в период упадка определенной, установившейся формы культуры. Этот прием, который можно назвать “остранением” по термину формалистов, является одним из способов противодействия существующей культуре, одним из самых важных способов отказа от ассилияции с ней и одной из стратегий для пересмотра сущности вещей. Все это имеет своей целью отказаться от косневшего, обыденного положения жизни в культурном мире, и от “загрязненных” познаний, оценок и образов жизни, и искать выход из сложившегося положения.

Толстой, применяя этот прием к русской дворянской культуре в период ее упадка, сумел обличить ее ложь и процесс разложения с точки зрения “природы”, т. е. крестьянства.

Однако между французскими писателями-просветителями и Толстым

есть разница. Прежде всего, у первых носителем текста является человек, принадлежащий к идеальной "природе". Дается текст таким образом, чтобы читатель видел цивилизацию глазами этого человека. У Толстого же носитель текста в большинстве случаев дворянин, близкий к крестьянам и имеющий в себе, в известной мере, элемент "природы". И текст дается в таком виде, что герой смотрит на "цивилизацию", т. е. на "высшее общество" с точки зрения "природы", т. е. крестьянства. С этой точки зрения он критикует "цивилизацию". С другой стороны, он смотрит на "природу" и на крестьянство с точки зрения "цивилизации" и дворянства, и узнает, что в нем самом таится зло "цивилизации". На основе этого он критикует самого себя. Итак, толстовским героям суждено стремиться к самопреобразованию, к добной "природе". Вторая разница между французскими просветителями и Толстым заключается в том, что первые представляют "природу" чем-то воображаемым и идеальным, Толстой, наоборот, изображает ее чем-то конкретным и реальным. Толстой видел "природу" в действительности, в русской деревне и крестьянстве. Нужно подчеркнуть, что Толстой принимал такое реальное за идеальное и из такого образа мышления вытекали его отрицательные стороны.